
黒の教団 夏のカレー祭

nakama

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の教団 夏のカレー祭

【Nコード】

N9458E

【作者名】

nakama

【あらすじ】

コムイ室長のふとした思い付きから、カレーを作る羽目になったエクソシスト達と科学班。果たして彼らの夕飯は無事完成するのか！？ ただの軽い話です。夏は特に関係ありません。時系列は教団帰還後辺り。パラレルワールドだと思ってください。

室長室にて

「いやあ、よく集まってくれたね」

黒の教団の中枢、書類が乱雑に積み上げられた室長室。そこに集められた皆の前にフラフラと現れたコムイは、仰々しくデスクの椅子に腰掛けた。

不可解な表情のままコムイをじっと見つめる一同。

それに気付いてか気付かずか、コムイはデスクの上の冷めきったコーヒーを口に運び、

含みある眼で彼らに語りかけた。

「どうして呼び出されたのか…、そんな顔をしてるね

ここに集まってもらったのは他でもない

まあ、もう予想はついてるのかもしれないけど

……実は、とても面白そうな企画を思い付いてしまったんだ

それは…ん？ ん、ああそうだよ、面白い企画だ

当然任務じゃないよ、だから言ってるじゃないか

え？ ちよ…、物投げないでよ、なんで!?

だから企画を…、待って、話聞いてよ！ 帰らないで！

……ふう、まず落ち着いて聞いてくれよ

僕は思ったんだけどさ、いつも僕らの食事はジェリー達が作ってくれるだろう？

それをもっと、僕らは感謝すべきだと思っただ

だから…、え？ 科学班のみんなに感謝？ してるしてる

つまり、ジェリー達を労って、今日ぐらいは自分達で食事を作る
ってのはどーだい？

ね？ 面白そうじゃない？

ん？ 科学班のみんなを労る？ いつもやってるじゃないか……
て痛い痛い！

分かってる分かってる！ もももちろみんなを労る企画も考え
てるよ

う、嘘じゃないさ！ いつかやるよ、うん、いつか……ね

……落ち着いてリーバーくん、分かってます仕事もしますから

で、どうだい？ みんなでやろうよ！ 出来の良さを競ったりし
てさ！

一番うまく作れたチームが勝ち！ 優勝したら……、まあそれは
後で

ちなみに審査員は僕ね……て、何てこと言っただ！ 鼻屑なんてし
ません！

リナリーのだけ食べたりリナリーを一番にしたりなんてなんて……
ちゃんと僕がフェアに判定するよ、当然じゃないか

で、どう？ やらない？ ていうかもうやるけどね

ジェリー達に今日は休んでいいって言っちゃったし
だから晚ご飯は自分で作るしかないよ、コックいないから

ね？ やるでしょ？ もう絶対やるよね

よし、じゃあチーム分けをクジで……、て待って神田くん！ 待
って！

ここまで聞いてやらないはないでしょ！ ご飯食べられなくてい
いのー！？

え、何この”やらない”感じの空気！ みんな冷たくない！？

もっと盛り上がってもいいんじゃないの？

せつかく僕が忙しいみんなの息抜きにと思って……

徹夜で計画を立てて……、材料も調達して……、ごう、色々とき……
なのに、なのにみんなして……、僕のこと邪険にして、ヒドいよ

……

……………え？

なんて？ アレンくん、今なんて言ってくれたの？

……………だよ！ その通りだよね！！

僕の思いやりを無下にする事なんてできないはずだよね！！

むしろ嬉しすぎて喜んで参加したいと思ってるんだよね！！ ね

！？

よ
やだなあ、言わなくても僕には君達の思いはちゃんと伝わってる

ねえ？ あ、ちょっと何そのため息、ねえ！？

……………じゃあさっそく始めようか、チーム分けはもう今あみだくじ
で決めちゃったから

ちなみに作る料理は”カレー”ね

いやー、ホントは好きに作ってもらおうと思ったんだけどさ

計算したらちよつと材料費が掛かりすぎちゃうみたいなんだよね
だから取りあえず調理室にある材料で出来そうなものってことで

……………まあそう白けた顔しないでよ、とにかく落ち着いてよ

きつと楽しいから！ 面白い企画になるから絶対！

どうか頑張ってくださいよ！ 僕らの晩ご飯のためにさ！！

よし、説明はこれで終わりだ

えーと、開始は5時からで、2時間あれば十分だよ

じゃあ僕は”仕事”してくるから、みんな頑張つてネ！ カレー

楽しみにしてるから！！

(……もうどうにでもすればいい)

コムイの走り去ったあとのデスクを見つめ、かつてないほど心を通
わせた一同。

かくしてこの白けた雰囲気の中、『コムイ主催 黒の教団カレー祭』
は幕を開けたのだった。

室長室にて（後書き）

他の団員の夕飯はどうするんだよ、などのシツコミはどうか胸の内
に止めておいて下さい。お願いします。

TEAM：1 甘口カレー

「リンクが同じチームで助かります
何せしっかり者だしおかし作りも上手ですし、ホント頼りになりますよー」

「褒めていただけるのは嬉しいですが、
そんなところに座ってないでさっさと野菜切ってください
私に全部押し付けてサボろうなんて思わないでくださいね」

「……………」

目敏く注意され、渋々リンクの隣に立つアレン。
調理台にはすでに粗方の材料と調理器具が用意されている。

「リンクはカレーの作り方知ってるんですか？」

「ええ、初歩的な料理ですから
ウオーカーは、料理の経験は？」

「恥ずかしながらほとんど無いです
修業時代もパンを買い漁って食い繋いだり、踏み倒す前提でツケ
てもらったり…」

「……………そうですか」

「じゃあ私の指示に従ってください」

そう言うつとリンクは手際よくジャガイモを手に取り、包丁を入れた。ジャガイモはまるで滑るようにリンクの手の中で回転し、走るような包丁捌きでジャガイモの皮のリボンを作り出していく。ほんの十数秒の間に、リンクの手の内のジャガイモはキレイに皮を剥かれ白い肌を露にしていた。

「こつやって皮を剥いてください
芽を取ること忘れないように」

「す、すごいですね…」

「どうやるのか全然分かりませんでしたよ…」

「あとは適当に大きめに切ってください」

その間に私は肉とタマネギを切りますので、終わったら二ンジンもお願いします」

無駄のない動きで作業に取り掛かるリンクに感心しつつも、アレンは包丁を片手に途方に暮れていた。
リンクの実演は見たものの、切り方がまったく分からない。
困惑しながらもジャガイモを手に取り、適当に包丁を入れてみる。

「あれ？ 結構固いな…」

「何か違うけど…、こんな感じでいいのかな」

「ジヨリジヨリジヨリ」

「出来ましたか？」

あっという間に肉とタマネギの下拵えを終え、リンクは再びアレンの元に戻ってきた。

「あ、ちょっと待ってください

あと2、3個で全部出来るんで」

「あー…、すごく小さくなりましたね

皮を剥くように指示したはずなんです」

アレンがザクザクと皮を切り落としただおかげで、傍らには分厚い木片のような皮が山積みになっている。

始めにリンクが剥いたもの以外、ジャガイモは可愛らしい小形へとすっかり変身を遂げていた。

「ジャガイモが半減しましたね」

「すみません、これでも頑張ったんですが…」

「……………、ニンジンがやりましょう

あなたは厚手の鍋と油を用意しておいてください」

何かをぶつけるように勢いよくニンジンを捌いていくリンクを尻目に、アレンは調理器具を漁りに向かった。山積みになされた鍋は不安定な角度を保ちながらグラグラと揺れている。

厚手の鍋とは言われたが、どれがいいのかアレンには分からない。

「これ、かな…?」

取りあえず一番上の鍋に手を伸ばしてみる。
山が崩れないよう慎重に持ち上げた。

が。

「のわぁーッ!!」

ガラガラガシャーッ

「…丁度いい鍋だと思いますよ
持ってきてくれてありがとうございます」

「り、リンクク怒ってますか…?」

「まさか、そんなことはありません
鍋の山からあなたを探し出したり、鍋を積み直したり、容易いこ
とです」

「（怒ってるな…）ホントすみませんでした…」

「いいえ、気にせずそこに大人しく座っていてください」

(…つまり何もするなど)

アレンは仕方なく傍の椅子に再び腰掛け、深くため息を吐く。怒濤の勢いで調理を進めていくリンク。

サボれるのは喜ばしいことだが、あんな風に邪険にされては気も落ちる。

(……でも)

リンクは料理が得意そうだ。

やはり料理は得意な人に任せておいた方がいい気がする。下手に手を出して迷惑をかけるのも申し訳ないことだし。

(僕は自分に出来ることをすればいいんですよ……)

それは、一見良い言葉のように見えて、ただの言い訳に過ぎなかった。

少し経って。

「出来ました」

「は、速…、速いですね」

ボンヤリしていたアレンは、突如目の前に現れたリンクに驚きながらも時計に目をやる。

調理を始めてから既に1時間以上が経過していた。

「そんなに速くないですね

もしかして寝ていましたか？」

「いや、まさかそんなはずは…」

あくまで意識が飛んだただだと主張したかったアレンだが、リンクはアレンが口を開くまえに素早く言葉を重ねてきた。

「もう完成なのですが、念のため味見をしていただけますか？」

「味見？」

そっと小皿を差し出すリンク。

皿には白い湯気を立ち上げらせる少量のカレーが。独特の香りが鼻孔をくすぐった。

「食べていいんですか？」

「どうぞ」

差し出された小皿を受け取り、マジマジと見つめる。

リンクが作ってくれたカレー、何もしてない自分が味見するのは申

し訳ない気もする。

「…いただきます」

しかしリンクの優しさ感謝して、アレンは小皿に口を付けた。

「少し甘口にしてみました」

ふとリンクが付け足す。

ガシャンッ

「……あまい、です……」

思わず小皿を取り落としてしまったアレン。
椅子に座ったまま固まっている。

「この喉にくる濃い甘さは一体……」

「甘口です」

「甘過ぎですよ！ もうカレーじゃないですよコレ！」

騒ぎ立てるアレンにもリンクは至って冷静に対処する。

「甘い方がいいですよ

疲れも取れますし、辛さ控えめで食べやすく」

「全然食べやすすくないです

甘過ぎて気持ち悪いですよ…

コレ、ホントに何入れたんですか？」

リンクは黙って調理台を見る。

釣られてアレンも見る。

湯気を立てる大鍋の傍に、無造作に転がる7つの瓶。結構な大きさだが、中身は既に空っぽだった。

「…蜂蜜を…」

「な、7瓶も入れたんですか…」

長い沈黙が続く。

「……ま、いいか」

このカレーは諦めよう。

夕飯のカレーは他のチームに分けてもらおう。

散々考えた挙げ句、アレンはそういう結論に至った。

(甘くてもいいや……)

コムイさんに食べさせるだけだし)

……そういう結論に至った。

TEAM：2 激辛カレー（前書き）

執筆を怠っている間に秋になり、いよいよ題名に意味がなくなってきました。

TEAM：2 激辛カレー

ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、マッシュルーム、牛肉…。

全て適度な大きさに切って、まず牛肉を炒める。

いい焼き色がついたら一旦肉を取り出し、今度はタマネギ。

飴色になるまで炒め、次いでジャガイモとニンジンも鍋に加える。

手慣れた手つきで調理をこなしていくリナリー。

もともと料理を好むリナリーは、下らない企画ではあるもののこのカレー作りを楽しんでいた。

「楽しそうだなリナリー」

調理台越しにリーバーが覗き込む。

「ふふ、料理久しぶりだから

でもごめんね、兄さんの暇つぶしにいつも…」

「いいよ、今回はまだマシな方さ

それに今回こそ、あのサボリ魔に…クククク………」

「え？」

リーバーが不敵な笑みを浮かべていた時。

「班長ー！ 持ってきましたよー」

「お、来たか」

調理室に、袋を抱えたジヨニーとタップが駆け込んで来た。ふたり共リーバーと同じように意味深に笑っている。

「なあに？ それ」

不思議そうに袋を指差すリナリー。
するとジヨニーとタップは自慢げに袋を開いて手を突っ込む。

「香辛料さ！ 辛口がいいと思って」

「へー、こんなに？」

「ああ、薬品庫から取って来た」

「……………薬品庫？」

固まるリナリーを余所にジヨニー達は次々と小瓶を取り出ししていく。赤いもの、どす黒いもの、頑丈に梱包されているもの、髑髏マークがついているもの……………。

「コレは……………」

「前に科学班で作ったヤツ
もちろん室長が作ったのもあるよ」

「大丈夫、死にはしない
ただ…、全部入れれば確実にヒドい目…」

「日頃の恨みを晴らすチャンスだ……！」

「だだだ、だめっ！！」

科学班3人の黒い笑みにリナリーは慌てて袋を取り上げる。

「だめよ、いくらなんでも…」

明らかに危なそうなのとかあるじゃない」

「大丈夫だって！」

死んだりなんてしないし、後遺症も残らない」

「だって俺らが自分の身で実験したから間違ない」

「まあ実際には室長に”盛られた”んだがな…」

「…そっ……………」

「ジョニー、これ覚えてるか？」

室長がコーヒーに入れててさ…」

「うん、アタリを飲んだロブが爆発したよね
あれ以来コーヒー飲む時は緊張しちゃって…」

「室長の発明品でな、”ロシアンルーレットスパイス”とか言ってたけ」

「……………」

「おいこれ見るよ！」

”HELL DRAGON”じゃないか!？」

「おおそれは!!」

口にするとまるで地獄の底から這い出してきた

ドラゴンのように火を吐き出すことになると言っ!!」

「あん時の班長マジでドラゴンみたいだったよ

火い吹きながら室長追い回してたもんね」

「ふざけたネーミングなのにあの凄まじい威力

あの後しばらくは胃がヒリヒリして辛かったな」

「……………あの」

「あとこれは一番の黒歴史の」

「もうやめて、分かったから…ッ!!」

居た堪れなくなり、リナリーはようやく止めに入った。

あそこまでの仕打ちを聞けば、もう実兄の擁護は不可能に思えた。

コムイの発明に悪意や下心が無い(はずの)ことは分かっているのだが、

科学班の悲惨なエピソードや哀れな表情を見るとやはり庇う気持ちにはなれない。

「みんなの気持ちはわかる、わかるよ？
でも…、やっぱり兄さんがのた打ち回る姿は見たくない……」

「リナリー……」

「だから、だから……」

リナリーはそつと傍の小瓶を手に取る。

そしてリーバー達に、優しく微笑みかけた。

「ホントに少しだけだからね……？」

「リ、リナリー……！」

リーバー達に笑いが零れる。

一転和やかな雰囲気を取り戻したりナリー達は、再びカレー作りに
取り掛かった。

しばらくして。

一同はコンロを囲み、無言で大鍋を見下ろしていた。

「これは……」

渋い表情でタップが言葉を漏らす。
タップだけでなく、皆が同じように渋い顔をしている。
鍋の中を睨み付けて。

「すごいな、これ……」

「真っ赤になつたね……すごい辛そう……」

「……な、なんで……」

グツグツと鍋の中で煮えたぎるカレーは、もはやカレーには見えな
い惨状となっていた。
ルーは真っ赤になり、ジャガイモやニンジンなどの具を溶かし尽く
し、
かき混ぜてみるとカレーとは思えない重さと粘りを感じた。

「溶岩カレー”ってどこか」

「さすがリナリー、室長の妹」

「ち、違う違う！

普通に作ったはずなのに！」

「じゃあ……」

リバーは調理台の小瓶を取り上げる。

茶色のガラス瓶にいれられた、ラベルもない透明な薬。

リナリー達が唯一少量を、カレーに入れた薬だった。

「これにあんな効果が…？」

「ラベル付いてないからどんな薬が分かんないね」

「あんな効果があるんだ、室長が作ったには違いないな」

瓶を囲んで考察する3人を余所に、リナリーはひとり鍋の前でうなだれていた。

「よりよってこんな薬を入れるなんて…」

リナリーが適当に選んだものだったが、見事にアタリだったようだ。運の悪さと料理の大失敗にシヨックを隠せない。

「……しかしこれを室長に喰わせたらどうなる？」

「わかんねえ、初めてなんじゃないか？」

「いつも実験台にされてるんだ、今回は実験台になってもらおうか…！」

落ち込むリナリーとは対照的に、科学班の3人のテンションは上がっていく。

「絶対にギャフンと言わせてやる！」

「このカレーは絶対室長に食べさせる…！」

「おう…！」

「やるぞおお！…！」

「兄さん、いじめん……！」

リナリーに、もう彼らを止める元気はなかった。

TEAM:3 シーフードカレー(+)

「神田、蕎麦はダメだぞ」

早くもマリは釘をさす。

「あ？」

「今回はカレーがメインだからな」

「…もう手に持ってるツスよ……」

チャオジはマリにそっと告げた。

蕎麦（乾麺）を握りしめ反抗的な眼でマリを威嚇する神田。

調理開始から早速、些細なことで場の空気は歪み始めていた。

とは言っても、もう他のチームは調理を始めているだろう。

このチームに限っては、まず神田を説得することから始めなければならなかった。

こういう企画を誰よりも嫌う神田は、コムイの提案の時点で分かっていたことだが、

すぐさまこの企画への不参加を表明した。

その際のコムイへの暴言の数々は計り知れなく、同意せざるを得ないものも多かったが、

今回のマリは未だかつてないほど辛抱強く粘って神田を説得しようとした。

と言うのは、これがチャオジーにとって初めての”機会”だと思っ
たからだ。

まだ入団して日が経たないチャオジーは、何をするにもやはり緊張
が消えていなかった。

本人の生真面目な性格から努めて明るく振る舞おうとしているのが
よく分かり、

マリとしては兄弟子として見て居た堪れない。

せめて皆との交流の場があれば……、そう考えていた矢先の今回だ
つたのだ。

かつてないマリの熱意には、気付くのに半時間ほど掛かったとはい
え、神田も押され、渋々承諾した。

そして食材を一通り漁って調理場に入ってきたところだったのだが
……。

「（準備速いな…）カレー作りに蕎麦は要らないだろ…」

「うるせエ、蕎麦を使うとは言われてない」

「だからってお前、カレーと蕎麦はさすがに……」

「一緒に喰うとは言ってねエよ」

神田は不機嫌に鼻を鳴らす。

口では反論しながら、手は淡々と蕎麦を茹でる準備を始めていた。

「だって、カレー作るって言ったじゃないか」

「喰うとは言わなかった
俺は作るのを手伝っただけだ」

神田にしては頭を使った言い訳。
胸の内ですら思いつきながらもマリは呆れ返る。

「お前なあ……………」

「フンッ」

水を入れた鍋に火を付けた神田。
茹でる準備は万端のようだ。

「仕方ない、カレーの準備も始めるか
確かシーフードカレーにするんだったな」

チャオジーに向き直るマリ。
今までのやりとりをハラハラしながら眺めていたチャオジーは慌て
て頷いた。

「は、はいッス」

「でも、あ、あの……………」

「ん？ どうした？」

「あの、神田先輩？」

「あん？」

声を掛けられ神田はチャオジーを睨み付ける。

「蕎麦なんですけど…」

怯えながらもチャオジーは鍋を指差した。

「今から茹でたら食べる時には伸びちゃうツスよ…」

「……………」

カチッ

（神田が黙って火を止めた…………！）

「…調理始めようか」

「は、はいツス」

「……………」

おぼつかない手付きで、チャオジーはエビを剥き始める。

神田は何も言わず蕎麦をそっと調理台の端に置いた。

そして的確に神田を黙らせたチャオジーに、マリは内心大いに感心していた。

…その後は神田もちよくちよく手伝いつつ、男だらけで危なっかしいながらも

坦々と調理が進み、このまま問題もなくカレーが完成しようとしていた。

事件はルーの完成間近に起きた。

「……おい」

鍋を片手に調理台に立つ神田は、釜で炊いている米を見ているマリに声をかけた。

「なんだ？ ご飯ならもう少しで炊けて」

「蕎麦がない」

調理台の端にそつと置いておいた蕎麦の束は、忽然と姿を消していた。

神田が今から茹でようと思っていた矢先に。

「まだ蕎麦食べる気だったんだな」

もう諦めてくれたのかと思ったのに「

「誰が喰うかつ」

それより蕎麦どこにやったんだ」

「俺は知らないぞ？」

二人はキョロキョロと辺りを見回すが、それらしきものは見当たらない。

「もうきつとカレーを食べるとのお告げだ、諦める」

「んな訳あるかよ

一体どこに」

「鍋に……」

背後で聞こえた声に振り返ると、そこにはチャオジーが縮こまって立っていた。

いつの間に背後にいたのか。

そんなことより、神田とマリは自分の耳を疑った。

「なん…だと……？」

「チャオジー、今なんて……」

狼狽えるふたりにますます困った顔をして、チャオジーは答える。

「カレーの鍋に入れました…ス

あの、”カレー蕎麦”にしようと……」

衝撃だった。

マリはチャオジーの予想外の思い切りの良さと唐突な発想にある意

味感心していた。

神田は”カレー蕎麦”という聞き慣れない料理名に戸惑いながらも興味をそそられていた。

マリが恐る恐る尋ねる。

「なんで急にそんな…」

「シーフードカレーじゃなかったのか？」

「いや、あの……」

行動のマズさに気付いたのか、チャオジーは俯いて決まり悪そうにしている。

（あまり責めてももいけないな……）

マリは取りあえずカレーの鍋の蓋を開けてみた。

顔に熱い湯気がかかり、カレーの食欲をそそる香りが立ち込める。しかしカレーとはまた違う、いい香りが合わさっているのが分かった。

「出汁の香り…？」

「はい…ツス」

カレーうどんみたいに作ればいいと思って…

作り方はよく知らなかったツスけど、やってみたら意外とうまくいって…」

モゴモゴしながらも必死に説明するチャオジー。

「カレー蕎麦」…、作りたかったのは……」

ポツリと声が聞こえ、神田とマリはチャオジーに向き直る。

「マリ先輩が…カレーを食べてほしいって、神田先輩に言ってたから……」

「……え？」

「でも神田先輩、蕎麦がすごく食べたそうで……」

「あ、ああ……」

「だから、俺なりに何か出来ることしようと思ったんス…！
ふたり共が美味しく食べられるようになって
いつもお世話になってるツスから、こんな時だけでも、役に立とうって……」

「!!!!!!!!!!!!!!」

まさかそんなことを思っていたなんて。

蕎麦は神田の我が儘だったけれど、マリのチャオジーへの気遣いがまさか

逆に気を遣わせていたとは、マリは考えもしなかった。

「…ありがとうチャオジー」

マリはそっとチャオジーの肩に手を置く。

「俺たちのためにわざわざ…、嬉しいよ」

「マリ先輩……」

感激で目を潤ませるチャオジー。

神田も、カレーの鍋を覗き込みながらそっと呟く。

「…まあ、悪くはなさそうだな……」

「神田先輩も……」

カレー蕎麦とは未知なものだが、折角のチャオジーの気遣いなのだ。食べてみるのも悪くないだろう。

いざごさもあつたが、これでチャオジーも少しは教団に慣れてくれたらろうか。

その目的が果たせれば、もはや夕食は問題ではない。

マリはフツと笑みを零す。

（しかし神田がフォローするなんて

少しは先輩らしくなったものだな……）

そう感心して振り返った時、鍋を見つめる神田の目が真剣だったのをマリは見逃さなかった。

（…本気だったか……）

神田の興味を惹くようなものを作るとは……。

マリは改めてチャオジーに感心したのだった。

TEAM：4 野菜カレー（予定）

ミランダは怖々と包丁を握る。

「わわ私、料理やったことあるっていつても失敗ばかりだったし、ドジで台無しにすることばかりだったし、上手に出来ないことばかりだったし……」

「ちょ、ミランダ落ち着いて、大丈夫だから俺ら料理経験なんてほとんどないし、ミランダが頼りなんさ」

「た、頼り……？」

「そうであるミランダ、お願いなのである」

「おお、おねが……」

（わ、私頼りにされてるんだわ！

お願いされてるんだもの、がが頑張らないと……！！）

深呼吸でなんとか心を落ち着かせるミランダ。

そんな様子をラビとクロウリーはハラハラしながら見守っていた。

「おおふたりはホントにお料理出来ないの？」

縋るような目でミランダは尋ねる。

ラビは期待に答えられないだけに、笑って返すしかない。

「うん、出来ない
すごく簡単なのなら出来なくもないけど…」

「あら、どんな？」

「目玉焼き？」

「……は、はあ」

「サンドイッチとか…」

「それも料理とは言えん出来じゃがな」

ブックマンが横から口を挟む。

「うるさいジジイ」

そんなところで休んでないで手伝え」

「年寄りを労らんか未熟者」

調理室の端の椅子に座ったまま、ブックマンは傍観を決め込んでいた。
手伝う気は全くなさそうだ。

「ちっ、偉そうに」

「まあまあ、ご老人なのだから…」

クロウリーさんはお料理とかは？」

いざいざを避けようと話題を逸すミランダ。

「私も料理は全く……」

「あれ？ でもクロちゃん一人暮らしだったんじゃ」

「まあ、エリアーデが来るまでは……」

しかし食べ物はたくさんあったから困ったことはなかったである」

「……クロちゃん雑食っぽいもんな」

「じゃあやっぱりお料理はやったことないんですね……」

ミランダの緊張はますます高まる。

失敗すればラビやクロウリー、ブックマンにまで迷惑をかけてしまうことになる。

(私しっかりしないと……しっしっかりしないと……!?)

「落ち着くであるミランダ……!」

「俺らも手伝うよ!?!? できる限りのことはするから……!」

あまりのプレッシャーに硬直するミランダをラビとクロウリーは必死で励ます。

そして10分後。

なんとか立ち直ったミランダを先生に仕立て、ラビ達はようやく調理を開始した。

「私はコムイさんに作るのだから、やっぱり体に良いものの方が良いと思って…」

あの、野菜のたくさん入ったカレーなんて、栄養があって、いいんじゃないかなんて……」

「ミランダ自信持って！すごく良いと思うから！」

「ミランダは優しいのである」

クローリーが取りあえず取ってきた山積み野菜から、ミランダは手近の野菜をいくつか取り出す。

野菜カレーと言うからには野菜が主役、彩り重視だ。

「ジャガイモとニンジン普通よね

トマトとナス、カボチャとか……」

真剣な眼差しのミランダを見ながら、内心安堵するラビ。

「なんか調子付いてきたようでよかった」

料理経験のない自分たちがカレーを作るとなると、ミランダに頼るしかない。

あのままでは下手したら皆が夕食抜きになるところだった。

（あんな謙遜することないのに……）

なかなか手際良く野菜を選定するミランダを見ると、ラビもクロウリーもそう思わずにはいられなかった。

「こ、こんなものかしら…?」

カゴいっぱいに積み重ねた野菜が調理台に置かれる。

「こんなに使うのであるか?」

「ええ、野菜がメインですから」

平静を取り戻したミランダは徐々に調子を取り戻してきている。柔らかな表情でラビとクロウリーに笑いかける。

「ラビくんはナスとトマト、クロウリーさんは…カボチャお願いできますか?」

(なんか和むわ……)

至って平和的に進むこの流れに、普段の混沌を見ているラビは人知れず癒されていた。

特に何も無く、ミランダ特製野菜たっぷりカレーは瞬く間に完成し

た。
幸いミランダお得意のドジも見られず、平穩に調理は進んだ。
大鍋には赤緑黄色と彩り豊かな野菜が並び、見た目も香りも申し分
ない。

「美味しそうである！」

「すげー、ミランダのお陰さあ」

「えわ、私だけじゃとても……」

無事に完成したのが嬉しいようで、ミランダは顔を赤くして微笑んで
いる。

「はあ、心なしか他のチームよりもすごく順調に出来た気がする」

あながち外れではないことを呟きながら、ラビも時計に目をやる。

6時40分。

終了時間はおよそ7時とのことだった。

コムイがふざけたことを言い出したときにはどうなるかと思ったが、
ミランダとクロウリーとチームだったおかげか案外平穩な時間だっ
たように思える。

調理室の端で椅子に座って眠りこけているブックマンを見ると腹立
たしいが、
ひよっとすると悪くない企画だったのかもしれない。

「さて、じゃあ早めにお鍋を食卓へ持っていきましょうか」

ラビがそんなことを考えていた時。
ミランダはそう言って大鍋を抱え上げた。
そして。

「ッッ！……！」

「……！！……！！」

「……ミランダしつかり、大丈夫？」

「ううごめんなさいごめんなさい……」

私やっぱりダメなんだわ……出来損ないなんだわ……」

床全体にぶちまけられ、野菜カレーは見るも無惨な姿となっていた。
ミランダがウツカリして躓いてしまったことが原因だった。
茶色に染まった床に転がる大鍋の中には、もうほとんど残っていない。

「もう……もうダメなんだわ私……」

「そ、そんな落ち込むなよミランダ」

俺らで運べばよかったのに、いきかなくてごめんな？」

「そうそうである、私たちも悪いのである」

取りあえず、ミランダに怪我がなくてよかった」

「でも…何も無い所でコケるなんて……!!」

「あ…あるある！ そんなのよくあるさ！」

なんとか励ますふたりだったが、ミランダは床に崩れ落ちたまま顔を上げようもしない。

「ラビ、どうするであるか…？」

「どうするって…、取りあえず何かやるしかない」

ラビは沈んでいるミランダの腕を取って訴える。

「ミランダ、諦めるのはまだ早い！」

あと20分あるし、なんとかなるかもしれないぞ！」

「そ…、そうである！」

諦めずにもう一回作ってみよう!!」

「…ラビくん、クロウリーさん……」

涙をいっぱい溜めた目でふたりを見上げるミランダ。勇気づけるように、ふたりは明るく笑ってみせる。

(…そうだわ、まだ諦めちゃダメよね

もしかしたら何とかなるのかもしいない…!)

「……ありがとう」

涙を拭い、ようやくミランダは立ち上がった。
さっきより少しばかり力のこもった、強い表情で。

「私まだ諦めません、なんとかしなきゃ
食材置き場に行きましょう、皆さん！」

「……………ん？」

調理室に漂う良い香りに、ブックマンは目を覚ました。
傍観のつもりが眠ってしまっていたらしい。

欠伸をしながら辺りを見回すと、調理台の鍋の周りを3人が取り囲んでいた。

何故か会話もない。
時計を見ると7時前。

この香りからすると、どうやらカレーは無事完成したらしい。

「出来たのか」

椅子から降りて近付くと、3人は同時にハッと振り返った。

「ああ、ジジイ」

どこか狼狽えた様子のラビ。

少し違和感を覚えながらも3人の囲む鍋を覗き込むと、中には確かにカレーがあった。

ごく普通のカレーのようだが、確か野菜カレーとか言っていたような…。

「す、少し手間がかかりすぎるので、普通のカレーにしたんです」

ミランダも狼狽しているように見えるが、それはいつものことなので違和感はない。

「…ふむ、まあよく出来ているじゃないか」

ごくごく普通のカレーだが、なかなか美味しそうだ。

この3人ではどうなるか心配ではあったが、やればできるものらしい。

「そ、そうであるか？」

「それはそれは…」

「うう、ありがとうございます」

乾いた笑いを浮かべる3人。

(実はレトルトだけどね……!!)

心の中で本音を漏らす。

食材置き場に行って吟味した結果、レトルトカレーじゃないと間に

合わないとなり、

3人は必死になって食材の山を漁り回って見つけた。

レトルトで済ますのはあまり良くないことだとは自覚しながらも。

ブックマンにバレないならまあいいかな、と3人は思っていた。

食堂にて

7時を少し過ぎた頃。

「どうやら、みんなちゃんとカレー作れたみたいだね」

長い食卓に並んだ鍋を眺めながら、コムイがうんうんと頷いた。

「いやあ、どうだった？」

なかなか楽しかったんじゃないかい？」

悪びれる様子もなく言っただけのコムイに周囲からブーイングが飛ぶ。

しかし、わざわざ用意した高い台の上にいるコムイは全く気にしない。

「コムイさんの行動はどこまで本気が分からないなあ……」

「長官に報告することには変わりありません」

この悪行、許されることはありませんから」

「リンク楽しそうだったのに……」

カレーも自分好みになったし、とはさすがに言えないアレン。リンクはひたすら手帳にコムイの発言を書き記している。

「遂にこの時がきた……」

わかってるな？ ジョニー、タップ」

そしてポンと手を叩く。

一同は緊張の面持ちで成り行きを見守る。

「みんな、食べていいよー！」

「……………は？」

一斉に声上がる。

評価は？ 勝敗は？ コムイの味見は？

コムイは真面目顔で言っただけ。

「いやだって、明らかに食べられたものじゃないじゃない、みんな」

「な、なにい！？」

まさかの対応に一同驚きを隠せない。

「アレンくんのはさ、一見普通だけど…」

「だけど？」

「ハチミツの瓶を大量に片付けてるところを見ちゃったねー」

「……！」

信じられない、という視線がアレンたちに一斉に向けられる。
なんだか気まずい面持ちのアレン。

「ま、まさか見られてたとは……！」

「甘いカレーは食べたくないしねえ
そしてリナリーのチーム！ …は、リバーくんたち」

「は、なんでしょう」

「何入れたんだい！？」

明らかに危険物だったでしょアレ！！」

リバーたちはもちろん反論する。

「なっ！ 違いますよ、入れたのはリナリーです！！」

「うう！ 間違っていないけどなんかひどい！！」

とは言ってもリナリーは完全に否定も出来ない。

他のチームは興味深そうにリナリーたちの鍋を眺めている。

「あと神田くんのチームね

変なモノ入れたでしょう、強いて言うなら蕎麦とか」

「変なモノ…」

シヨックを受けるチャオジーとは裏腹に、神田は黙って鍋の前に突
つ立っていた。

何とでも言う方がいい、といった感じの勇ましい気迫が見られる。

(神田は特に何もしてないけどな…)

心の中でこっそり呟くマリ。

「そしてラビのチーム…」

「一見普通のカレーだけど……、レトルトでしょっ！」

「ちい、バレたか…！」

ラビが悔しそうに指を鳴らす。

「みんなちゃんと作ってるんだから、チートはダメでしょー」

「うう、ごめんなさい…」

「ミランダの傷を抉っちゃダメである！」

「こけてカレーを零したのも仕方ないことだったのである！」

「く、クロちゃんそれ傷抉ってるさ…！」

更に沈むミランダを見て慌ててクロウリーを止めに入るラビ。

「とーにかく！ そんなもの食べるわけにはいかないでしょ？」

「今回はいただくのはやめておくよ、僕もなにか食べるモノ探さないかね」

「じゃあ、と手を上げてコムイは颯爽と去って行く。

食堂に残された一同は呆然とその場に立ち尽くした。

そしてすぐに。

「ジヨニー、タップー！」

「このまま逃がしちゃダメだ、追っぞ！」

「アイサーツ!!」

溶岩カレーの鍋を抱えて駆け出す科学班3人。

何がなんでもコムイに食べさせるらしい。

インテリ系とは思えない俊敏さで追いかけていく。

「こ、こぼさないでね!」

リナリーは背後から小声で注意したが、すでに3人は扉の向こうに消えていた。

心配そうに3人を見届け、途方に暮れる。

「……どうしようかな」

「どうやらもう終わったらしいな」

状況を察してマリは神田とチャオジーに向き直る。

「ではもう食べてしまおうか、そのカレー」

「…神田先輩、もう食べてるツスよ……」

チャオジーが見つめる先には既に器にカレーを入れ蕎麦を啜っている神田。

神田の蕎麦への執着、恐ろしいものだ。

(そんなに食べたかったのか…?)

「マリ先輩もアレ、食べるスか…?」

「…ああ、せっかくチャオジーが作ってくれたからな
神田も気に入って食べてるようだし、俺もいただくよ」

マリの言葉にパツと表情を明るくするチャオジー。
カレーを器に入れる、軽快な音に、マリもまた優しく微笑んだ。

「食べないんですか？」

「食べませんよ、そんな甘いの」

リンクに勧められてもアレンは食卓につくのをひたすら拒む。

「別に普通でしょう、これくらい」

「そんなのリンクだけです」

甘過ぎるんですよ、絶対いりません」

「しかし、そうすると夕食が抜きになりますか…」

「……………、いいです」

他のチームのを分けてもらいますから」

とは言ったものの、どのチームもユニークで危険なものばかりだ。
唯一普通のカレーといえば……………。

雑然とした食堂の中、ラビは平然としていた。

「みんな意外とえらいもん作ってんなー
それに比べりゃ俺らなんてまともまとも、なあミランダ」

「そ、そうかしら……」

場の空気についていけないミランダはただオロオロしている。
クロウリーもどうしていいか分からないらしく、スプーンをずっと
啜えたままだ。

「…もう食べようか」

せつかく俺らで作ったカレーなんだし」

ラビは鍋の蓋を開ける。

「ええ…、でも作ったなんて、レトルトなのに……」

「もう落ち込むのはやめるである」

ミランダのカレーが食べられないのは残念であるが、楽しかった
である」

「クロウリーさん……」

「そーいうことさね」

ほらミランダ、お皿取って」

ホッと笑みを漏らすミランダ。

2人の気遣いが心に染みた。

そして自分の不甲斐なさも改めて実感した。

(でも落ち込んでちゃダメなのよ…)

強く心に言い聞かせて、ミランダは皿を手渡した。

その時。

「あの一……」

声に振り返ると、そこにはアレンが立っていた。何故か申し訳なさそうな表情で。

「アレン、どうした？」

「いや、実は……」

控え目に笑いながら、アレンは鍋を指差す。

「そのカレー、分けてもらえませんか？」

「え？」

「あの、私も！」

アレンの隣にリナリーも駆け付けた。胸の前で手を合わせて懇願する。

「私たちのカレー、食べられたものじゃなかったでしょ？だから…、お願い！ そのカレー、どうか分けてくれないかな？」

ポカーンとして突っ立つミランダ。

「別にいいさあ、なあ？」

「もちろんである、みんなで食べると美味しいのである！」

クロウリーも嬉しそうに頷いてミランダを見る。

「そ…、そうですね」

みんなで食べましょう、一緒に」

「ありがとう！」

ニツコリと笑うアレンとリナリー。

その笑顔に何だか癒された。

失敗もしたけれど、こんなに騒がしくて明るい夕食も悪くないのかもしれない。

ラビがカレーを器に注ぎ、クロウリーが食卓に並べる。

「もう神田たちは食べてるみたいですね」

「リーバー班長たちどうするんだろ…」

まだ兄さんを追いかけてるのかしら」

心配して扉の方を向くと、激しい閃光と銃撃音が響き渡っている。

「大丈夫なんじゃね？」

「さー、俺らも食べようさあ」

席に着きながらラビが促す。

白い器に盛られた白飯と、ごくごく普通のカレー。
だけど何故か楽しい、まるで遠足のよう。

皆はスプーンを手に持ち、声を揃えた。

「いただきます！」

こうして騒がしくも楽しく、『コムイ主催 黒の教団カレー祭』は
閉幕した。

主催者が結局あの溶岩カレーを食べたのかどうかは分からないが、
話によると後日、憔悴しきった様子でカレー鍋を引き摺るリーバー
たちが目撃されたらしい……。

食堂にて（後書き）

軽い気持ちで書き始めたらダラダラになってしまっ
て、D灰ファンの方々すみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9458e/>

黒の教団 夏のカレー祭

2010年10月9日04時44分発行